

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

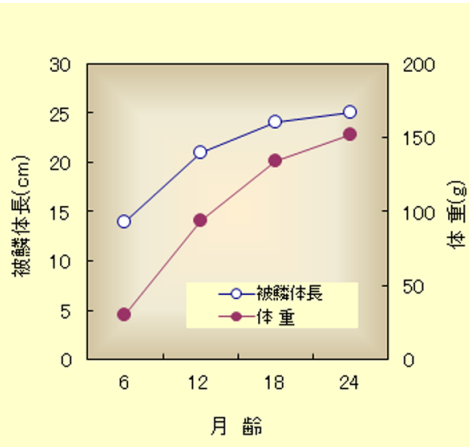
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命: 2歳前後
成熟開始年齢: 9カ月(一部)、12カ月(100%)
産卵期・産卵場: 10～7月で、盛期は2～7月と11～12月の年が多い、沿岸域
索餌期・索餌場: 周年、沿岸域
食性: 動物プランクトン等
捕食者: 中大型浮魚等

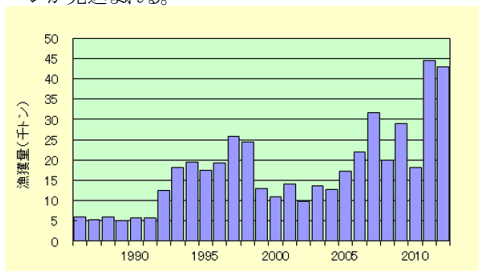


漁業の特徴

主に旋網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網でも、また、高知県では多釣りでも漁獲する。シラス(稚魚)期は船曳網で漁獲される。外国船による漁獲はない。

漁獲の動向

漁獲量は1991年までは5,000～6,000トンであったが、1992年から増加し始めて、1997・1998年には2.5万トン前後となった。1999～2004年では1万～1.4万トンに減少したが、その後増加した。2007～2010年には1.8万～3.2万トンの間を変動したが、2011年に4.5万トン、2012年に4.3万トンと連続で過去最高クラスの漁獲量となった。2013年も4万トンが見込まれる。

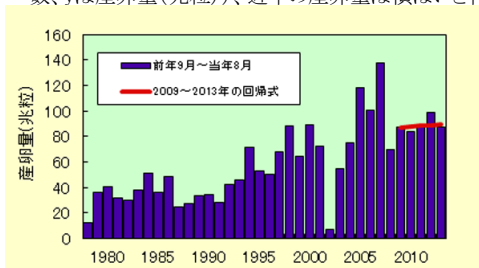


資源評価法

産卵量を資源指標値として、その推移により資源の水準と動向を判断した。産卵量として、各県水産試験研究機関と水産研究所による改良型ノルバックネットの鉛直曳採集結果に基づき、中央水産研究所がとりまとめた月毎の産卵量データをを用いた。ウルメイワシの産卵期は10月頃始まり翌年の7月頃まで続くことから、産卵量として前年9月～当年8月を集計した。

資源状態

2004年産卵期から2007年産卵期まで産卵量の増加傾向が続き、2007年産卵期にはピークの138兆粒となった。2008年産卵期には69兆粒に減少したが、2009～2011年産卵期には84兆～87兆粒と安定した。2012年産卵期には99兆粒に増加した。2013年産卵期では9～6月の産卵量84兆粒であり、産卵量の9～6月と7～8月の関係から、年間産卵量は87兆粒であると見込まれた。これは、過去最大と最低の間を三等分した中位にあたる。過去5年間(2009～2013年産卵期)の産卵量の回帰直線は $y=1.488x+84.42$ となり(x は年数、 y は産卵量(兆粒))、近年の産卵量は横ばいと判断された。



管理方策

2011・2012年における漁獲量の増加にもかかわらず産卵は順調であったことから、現在の漁獲圧が資源に悪影響を及ぼす可能性は小さいと判断された。基準となる漁獲量に δ_1 と γ_1 を乗じたものをABClimitとした。近年の漁獲量は年変動が激しいことから、基準となる漁獲量として直近4年間の平均漁獲量(3.4万トン)を用いた。 δ_1 は資源水準中位の時の標準値0.8とした。 $\gamma_1=1+k(b/l)$ であり(kは係数、 $b \cdot l$ は産卵量の最近3年間の回帰式における傾き・3年間の平均値)、 $k=1$ 、 $b=-0.0086$ 、 $l=91$ (兆粒)から γ_1 を1.00とした。ABCtargetはABClimit×安全率0.8とした。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	27千トン	$0.8Cave4-yr \cdot 1.00$	-	-
ABCtarget	22千トン	$0.8 \cdot 0.8Cave4-yr \cdot 1.00$	-	-

資源評価のまとめ

- 資源量の水準・動向は産卵量で判断した
- 2013年産卵期の産卵量は、1978年産卵期以降では中位水準となった
- 2009～2013年産卵期の産卵量は横ばい傾向にある

管理方策のまとめ

- 近年の漁獲量の増加にもかかわらず産卵は順調であったことから、現在の漁獲圧が資源に悪影響を及ぼす可能性は小さいと判断された
- 近年(2009～2012年)の平均的な漁獲量に、資源量の指標値である産卵量の推移から求めた係数1.00と資源水準が中位の時の係数0.8をかけた値を生物学的許容漁獲量の上限とした

執筆者: 阪地英男・梨田一也

資源評価は毎年更新されます。